

## 【選択】なぜ古典を教えるのか

- ◆期日 平成30年8月6日(月)～8月8日(水)
- ◆主な対象 中学校・高等学校国語科教諭
- ◆定員 40名
- ◆会場 渋谷キャンパス
- ◆応募期間(仮申込) 平成30年4月16日(月)10:00～4月19日(木)23:59
- ◆受講料 2万円
- ◆時間数 18時間 【選択領域】受講者が任意に選択して受講する領域
- ◆講習内容

どうして古文をやるの?—生徒にそう聞かれたらどうお答えになりますか。

当講習では、本学で、日本古典文学、国語学、民俗学、国語教育学等の研究・教育に携わる講師陣が、具体的な資料を紹介しつつ、それぞれの立場から古典の持つ意義について論じます(講座によっては演習形式を取る場合もあります)。そのうえで、受講者の皆さんには、実践家の立場から中学校・高等学校の国語科における古典教育の意義について考えていただきます。

### ◆担当講師

- 土佐 秀里 國學院大學文学部教授
- 野中 哲照 國學院大學文学部教授
- 岡田 哲 國學院大學文学部教授
- 石川 則夫 國學院大學文学部教授
- 長谷川 清貴 國學院大學文学部准教授
- 小田 勝 國學院大學文学部教授
- 小川 直之 國學院大學文学部教授
- 杉山 英昭 元國學院大學大学院客員教授
- 林 利久 國學院大學文学部兼任講師
- 豊島 秀範 國學院大學文学部名誉教授
- 高橋 大助 國學院大學文学部教授

### ◆シラバス

講義名	古代和歌の「季節感」とは何か
担当講師	土佐 秀里
講義概要	和歌といえば、四季折々の風物を詠むものであり、日本列島の気候風土に即した「日本的」なものと考えられている。しかし、万葉集や古今集の季節詠をよく読んでみると、そこには皮膚感覚的な実感・実体験とはかけ離れた、ある種の「観念性」があることに気づかされる。その「観念性」とは、中国伝来の暦法に基づく季節認識であり、かつ、季節の順行が「政治的」な正しさを保証するという論理である。古今集の季節詠の多くが「屏風歌」というバーチャルな世界の産物であったことは改めて言うまでもない。古今集の観念性を批判した正岡子規は、万葉集の観念性には気づくことができなかつたし、しかもヨーロッパ伝来の「リアリズム」の理論を和歌文学に応用した結果、和歌が「自然」の「写生」であるという新たなイデオロギーを作り出し、むしろ季節詠の観念性を延命させることに貢献したのである。本講は、こうした問題を具体例に即して辿りながら、実感主義・経験主義を脱した言語観を提唱しようとするものである。

評価方法	教場レポートにより評価する。
------	----------------

講義名	『平家物語』で身につける想像力
担当講師	野中 哲照
講義概要	<p>「なぜ古典を教えるのか」という問いにたいする答えの一つに、「古典の中に人間の普遍的な姿を学びうるからだ」という言い方があります。時代を超えて生き残った古典には、いつの時代の人々にも訴えかけるものがあるということでしょう。</p> <p>それにしても、物語が伝えようとしている意味を正確に読み解くことができなければ、古典を学ぶ意義も半減してしまいます。「現代語訳はできたのだけれど、作品世界が深く理解できたとは言えない」という状況が、それです。『平家物語』などの軍記物は、現代人が思う以上に、読者の想像力を要求している物語です。われわれは、心してかかれば、その作品世界に入ってゆけないのです。</p> <p>この講義では、『平家物語』などの軍記物で、緻密な豊かな想像力を鍛えます。その力が身に付けば、古典の授業が退屈なものから面白いものへと変身するはずです。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	芭蕉句の評価と解釈
担当講師	岡田 哲
講義概要	<p>「古池や蛙飛びこむ水の音」や「五月雨をあつめて早し最上川」などの句をはじめとして、松尾芭蕉の発句は、近世・近代そして現代にいたるまで、多くの人々に親しまれている古典を代表する韻文表現である。また上記の2句は、今刊行されている名句辞典の類にも必ず収録されているが、これらがなぜ名句として人口に膾炙されているのかを、明確に答えられる人は少ない。事実「古池～」の句は、芭蕉の門弟の許六と野披との間でも、その評価をめぐる論議が起きている（『許野消息』）。本講義では、まず芭蕉の発句を例に挙げて、句を評価するための基準・条件を挙げてみたい。ついで、『おくの細道』『去来抄』収録句を取り上げて、いまではかえりみられることの少ない江戸期の古注や、俳諧之連歌が受け継いだ和歌・連歌の技法を踏まえながら、作品解釈の方法を提示したい。</p>
評価方法	講義内容に関するレポートを、最後の10分程度でまとめて下さい。

講義名	なぜ「舞姫」を読むのか
担当講師	石川 則夫
講義概要	<p>森鷗外「舞姫」は現代文の定番教材として長く採用されてきたが、その文体はほとんど古典教材と言ってもよいほどの難しさがある。これを現代文教材として扱うことに躊躇する教員が多いのも当然ではあろう。したがって、現代語訳のテキストを使用して授業を行っているということも珍しい話ではない。また、「舞姫」のストーリーにしても、エリート官僚への道を突き進んでいた太田豊太郎が、自らの主体的な生き方に目覚め、立身出世の道を外れていくことも意に介さず、薄幸の美少女エリスとのロマンスを謳歌するが、再び官僚への道へ舞い戻ってしまう。つまりは出世のためにエリスを捨てて顧みない男として読まれるために、その節操のない行動は批判的ともなってしまう。つまり、高校生においてはすこぶる評判の悪い男性像を教えなければならぬことにもな</p>

	<p>って、その内容からも敬遠されがちな教材なのかもしれない。</p> <p>しかし、ではなぜ「舞姫」は日本近代文学史の最初期にいつも言及される作品なのだろうか。また、確かに文章は古く、明治の古典として位置づけられるところもあるが、この作品を古典として遠ざけてしまってよいのだろうか。</p> <p>この講義では、「舞姫」の新しさを掘り起こし、現代文としてこれを読まねばならない価値について考察してみたい。</p>
評価方法	<p>講義の最後の10分程度の時間で400字ほどのレポートを記述していただきます。テーマは講義の最初にお話しします。また、森鷗外「舞姫」を読んでおいていただきます。文庫版の本文で結構です。</p>

講義名	中国思想の考え方——孔子の「仁」を例に
担当講師	長谷川 清貴
講義概要	<p>現代において、古典、中でも漢文は疎遠の度合を増しています。漢文を学習するうえで、「なぜ中国の古い作品を読まなければならないのか？」という疑問は、通り一遍の解答は提示できても、なおその意義を考えなければならない根本的な問題であると思われる。</p> <p>高校「古典（漢文）」のほとんどの教科書では、思想文献として『論語』が掲載されています。その中で、孔子が重視した「仁」についても、ほぼ必ず関連する章が挙げられていますが、よく知られているように、『論語』中には、仁に関する記述は多くても、結局仁が端的に何を指すか半然としません。『孟子』は「仁」とともに「義」を重視し、その定義も、「惻隱の心は、仁の端なり、羞惡の心は、義の端なり」や、「仁は、人の心なり、義は、人の路なり」と比較的明快ですが、それが孔子のいう「仁」と一致するとは限らない。そのため、孔子の「仁」は一般的には、いつくしみ、おもいやりと解されつつも、その決定的定義は未だなされていないといえます。</p> <p>本授業では、中国思想の考え方の一例として、「仁」について深く掘り下げ、孔子が重んじた「仁」をどのように考えるべきかを考えます。</p>
評価方法	<p>授業の最後に、授業内容の要約と、内容に関する見解を答える試験を出題し、その内容によって評価します。</p>

講義名	古典文法教科書の記述を検討する
担当講師	小田 勝
講義概要	<p>高校生向け古典文法教科書（副読本）の文法用語・文法説明には、教科書によって色々とゆれがみられます。活用表の語幹の書き方、形容詞の仮定条件形、希望・願望の使い分け、などです。この講義では、古典文法教科書にどのようなゆれがあるのかを確認し、その上で、どのような文法用語・文法説明が、古典文法教育では適切であるか考えます。合わせて、古典文法の学習参考書の記述の問題点も取り上げます。</p>
評価方法	<p>講義にもとづく筆記試験による。</p>

講義名	「伝承文学」という視点—古典と口承文芸—
担当講師	小川 直之
講義概要	<p>日本の古典文学の中には、さまざまな伝承文化をみることができる。その伝承文化に</p>

	<p>は、儀礼や行事などのほかに、昔話や伝説など、口承文芸とか民話などと呼ばれている口誦の物語がある。こうした古典の中に表出している、あるいは埋め込まれてる伝承文化を見ていくと、日本文化がもつ持続性とか、変化・変容などを知ることができる。</p> <p>平成30年度の講習では古典の中の口承の物語に焦点をあてることにする。具体的には「古事記」にある三輪山伝説、「平家物語」巻第八「緒環」と、昔話として伝承されている「蛇簪入」を取り上げ、口誦の物語が歴史過程で文字化されている姿を講じていく。「古事記」の三輪山伝説や「平家物語」の「緒環」は、いずれも始祖伝説といえる物語で、人物の特異性を語る時に異類婚姻譚が使われているのである。こうした異類の子孫の描き方と、老人が子どもたちにイロリ端などで語って聴かせた「昔話」としての蛇簪入の物語とを比較することによって、文字テキスト化された物語と口承の物語がどのように違うのかなどを捉えていく。</p> <p>口承の物語を素材にした文学は、近代文学の中にも多くみられるし、中学生や高校生の多くが、子どもの頃に親しんだ絵本にも口承の物語が取り込まれている。こうした視点を授業などに取り込むことによって、国語教育に広がりを与えることができよう。</p>
評価方法	小レポートの点数による。

講義名	学習材としての開発教材への構想
担当講師	杉山 英昭
講義概要	<p>古来から、「かぐや姫の物語」とか「竹取物語」とか呼称された初期物語から、現在の我が国の古典文学の学習は開始され親しまれている。仏典や漢籍などの古代説話や、内外の諸伝承にもその淵源を見るこの物語は、そのスケールの大きさから古典文学学習の劈頭を飾るにふさわしい教材だと評することができる。「竹取物語」の教材化の歴史は古いが、現代においてはどのような文学作品が学習材としてふさわしいかという問題は、古典文学研究の進展と現代という時代への認識とによって考究されなくてはならない。ここでは古典文学の教材化の視点から、古筆を含めた教材原本や古典や近代の絵画資料など、教材のビジュアル化の問題をも含めて、新学習指導要領改訂を視野に入れて、学習材としての古典文学教材を構想してみたい。</p>
評価方法	小論文叙述による評価。二つの問題のうち、一問題を選んで論述する。

講義名	古典籍を用いた教材作成と 「学びへの誘い」
担当講師	林 利久
講義概要	<p>古典文学を学ぶには、原文を読む力が重要です。しかし、古典文学の中で描き出される日本の文化は、現代の社会と余りにも掛け離れていて、学ぶ者には大きな違和感を与えているのではないのでしょうか。</p> <p>ビジュアル資料を用いて古典文学を考える面は様々な部分で語られていますが、國學院大學図書館所蔵のデジタルライブラリーなどから、古文書「織田信長朱印状」、「豊臣秀吉朱印状」、「吾妻鏡（古活字版伏見版）」、古典籍「月々のあそび」、「竹取物語絵巻」、「伊勢物語絵巻」、「伊勢物語（奈良絵本）」、「義経奥州落絵詞（絵巻）」等の資料を用いて映像資料を作成し、古典文学や日本の文化についての授業に活用できる資料作成について考えてみます。古典資料と現代の活字資料を融合することで、生徒たちに古典文学や日本の文化についての新たな興味を引き出す機会と方法を考えてみます。</p>

	また、ネット上に散見できるサイト等を紹介し、授業への活用を紹介します。
評価方法	

講義名	『源氏物語』の成立と書承の実態
担当講師	豊島 秀範
講義概要	<p>どうして〈古文〉を学ぶのか。それは、今の我々が読んでいる〈小説〉や〈劇画〉などのように、人々の関心の高い、当時の〈現代の物語〉であったからです。そうした実態について、『源氏物語』を中心に、『紫式部日記』や『狭衣物語』などを取り上げて、以下順序で考えてみます。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『源氏物語』が世に広まる情況</li> <li>2. 書写することと、物語の改作</li> <li>3. 和歌を書き加える『狭衣物語』</li> <li>4. 〈読み聞かせ〉が当時の読書方法</li> </ol> <p>以上について、具体的な資料に即して、一緒に考えてみたいと思います。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による